興法寺おさんぽマップ

令和４年4月作成：石畠敏夫, 名畑外志雄

①安居寺(弥勒山安居寺・やろくやまあんごじ)
養老２年（718）、インドの高僧が釈迦如来御作の観音像を安置する地を探し、当時「菅の葉山」といっていた地に、観音像を本尊として奉安し開山した。開山の頃には、遣唐使や留学僧などの往来が盛んであった。（菅の葉山は安居寺から北へ松の山続きをいう。興法寺あたりで、万葉集以来の名所。）二十四の支坊を持ち、この支坊の中には興法寺地内には今も有る浄教寺、弘法寺（後に砂子谷地内に移転）が有ったと云われる。加賀藩の祈願所となり、歴代藩主等によって多くの宝物等が寄進された。

②かんざし橋
能登七尾城の領主一族に松波義親（1527-1577）という武将がいた。義親の討死後、内室の富士の方は越後を目指す道中に安居寺で一夜を明かした。その際、御手洗川で村人が難儀している様子を見て、黄金のかんざしを銭に替えて頑丈な橋梁を造らせたといわれている。

③観音道(安居道)
江戸時代初期から加賀藩時代に前田家の祈願所となり、安居寺は観音信仰の寺として栄えた。安居寺への道は、埴生で北陸街道と別れ、浅地を経て高木、興法寺から安居に入る約９ｋｍの道である。

④古屋敷伝説（葭谷藤兵衛丹治叔信の葭谷館）
明治後期にこの土地を開墾した時は、石垣があり畑全体に茨が密生していたと云われている。ここは葭谷（よしたに）という武士が住んでいた屋敷跡であるとのこと。

⑥丸山古墳
蓑輪大将軍古墳群から続く南側の丘陵頂部に立地する南北2基の円墳です5世紀末頃に築造された古墳。2基の 円墳から石斧や須恵器が表採された。北側の1号墳は直径約16m、高さ1.7m の円墳、2号墳は直径約1 2m、高さ1.4mの円墳。
丸山：四等三角点108m

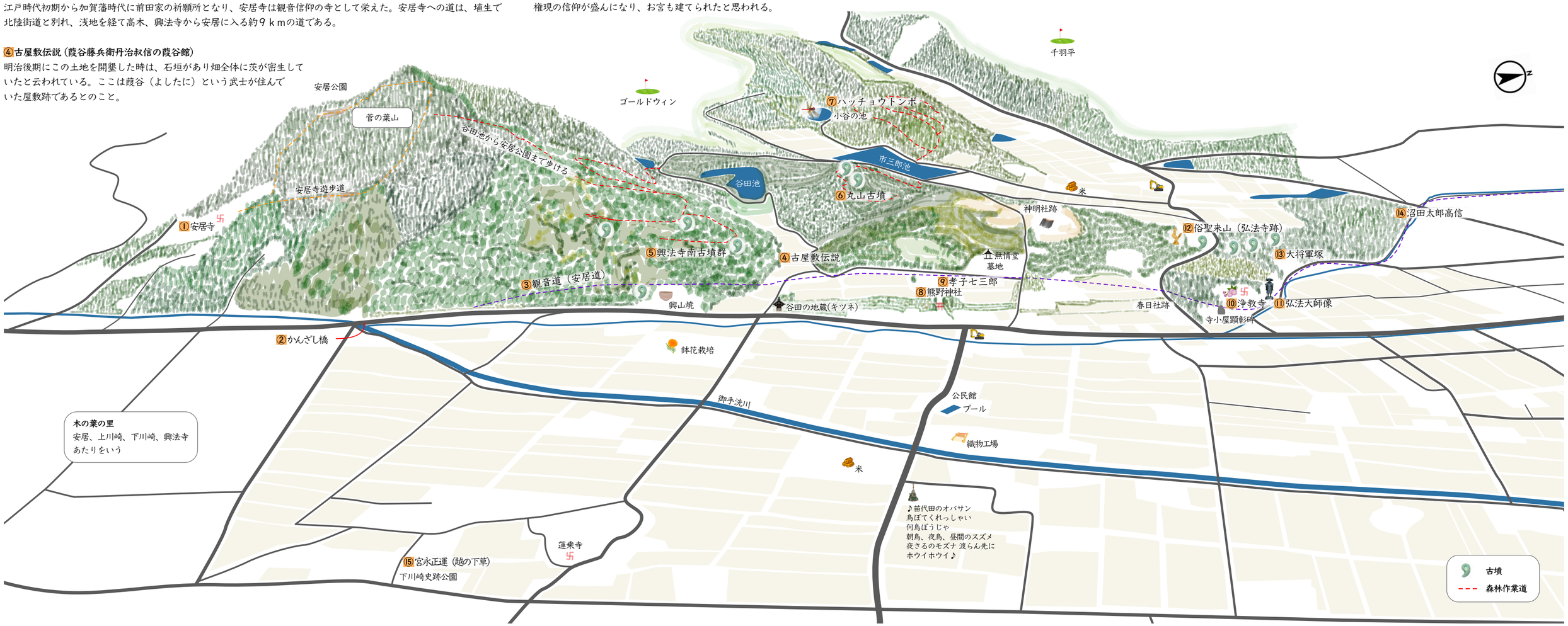
⑦ハッチョウトンボ
興法寺の小谷の池は富山県で最も古いハッチョウトンボの標本が残されている所であり、本種のほか約50種類の トンボが記録されている。1971(昭和46)年11月18日に県の天然記念物に指定される。小谷の池周辺は、全国的にも珍しい多種類のトンボ生息地となっている。

⑧熊野神社
平安時代の末から熊野信仰が全国的にひろまり蟻の熊野詣と称して大勢が連なって、紀伊半島南端の熊野へ参拝した。熊野からは御師（信者の為に祈祷、案内をし、参拝・宿泊などの世話をする神職）が全国を回って勧進したので、 熊野権現の信仰が盛んになり、お宮も建てられたと思われる。

⑪弘法大師像
弘法大師（空海 774 - 835）が北陸の地あたりを行脚された折、持っていた錫杖で土をつつくと、土の中から美しい清水が滾々と湧き出た。郷人は大師の徳を伝えようとし、村の名に弘法とつけた。慶長年間（1596-1615）、現在の興法に改められたと伝えられている。

⑫俗聖来山（弘法寺跡）
興法寺の山中に開の神明といふ社があった。その東北に一つの小山があり、俗聖来山（おんしょうらいさん）と呼ばれていた。弘法大師がこの地を訪れた際に、足を休め弘法寺という一寺を建立した。その跡地には今も金鶏が埋まっていると伝えられている。

⑬大将軍塚
大将軍(だいしょうぐん)は陰陽道において方位を司る八将神(はっしょうじん)の一つ。 正徳2年(1712)加賀藩の調査によると大将軍林と記されており、社殿は無く、森林社業をもって神社としていたようだ。



興法寺古墳群
興法寺地区には、三つの古墳群ある、大将軍、丸山、興法寺南古墳群である。いずれの古墳も砺波平野を見渡す場所にある。埋葬されている権力者がいつまでも、村を眺望出来る場所で、丘陵の裾で農耕生活している民が毎日拝める位置に築造されたと考えられる。

⑤興法寺南古墳群
南古墳群は4基の円墳が5~6世紀に築造された。2号墳は昭和53年に調査で古墳と確認。 3、4号墳は平成22年再調査。4基の円墳があり、1号墳は昭和25年頃、陶芸家山本正光氏(初代興山)が畑を宅地に造成中、管玉と鉄刀が出土した。2～4号墳は遺物は未発見。

⑨孝子七三郎
元禄時代（1688-1708）に興法寺の農民であった七三郎の弟が、上納米の不正をはたらいたことで、父親長右衛門が牢屋に入れられた。七三郎は、牢につながれ寒天にさらされる父親を思うに忍びずその罪をかぶった。時を経て弟は一切を白状したが、七三郎の孝行、肉親愛に藩公はいたく感激され、父子の罪状を赦し賞金と終身二人扶持をくださった。

⑩浄教寺（浄土真宗本願寺派小森山）
浄教寺はもと真言宗安居寺の二十四坊の１つであった。寺の長であった了空（浄教寺開基）が、文明6年(1474)蓮如上人の教化を受けて浄土真宗になったといわれている。平成20年に境内にある桜が、新品種であることが報告され、浄教寺てまり桜と名付けられた。

⑭沼田太郎高信
藤原鎌足から繋がる沼田家。1520年19代沼田太郎右衛門高信は、越中国砺波郡蓑輪村の山端に居館を構えた。用水の新設や耕地の開拓など、今日の蓑輪は元より、安居、興法寺、川崎等の繁栄に心を砕き基を据えたと言われる。

⑮宮永正運
宮永正運(みやながせいうん1732年生まれ）は、砺波、射水郡の陰開横目役や産物裁許役等をつとめた公人で文化人。「私家農業談」「荒年救食誌」「越の下草」等を著す。 特に越の下草は、宮永正運が実際に現地へ出かけ、正確にまとめた全6巻の随筆集で、越中近世随筆の傑作の一つ。